

「使い始めて、分ったことがあるんですよ」

この号の座談会を開催したときの看護師長さんから出た言葉です。患者さんの代弁者として、そして看護のプロとしてトイレをさらに良くしたいという思いが込められていました。

「自力でトイレに行けた！」

脳腫瘍から復帰した患者さんが、自信を取り戻し退院できると実感できた瞬間だったそうです。

「ベッドから降りて、トイレに行って、ベッドに戻ってくる」

私たちが何気なく行っている行為がいかに複雑で、大変だったかを語ってくれました。そして退院したときに、風景が輝いて見えた嬉しそうに話してくれました。

集中型トイレから分散型トイレが主流になり、分散型トイレに求められる要件がますます増えてきています。分散型トイレに替ったときは、ベッドからの距離が近く患者さんがトイレに行きやすくなったと、満足度がとても高まりました。今はそれが当たり前になり、さらにトイレ空間には患者さんの安全、ふたり介助の広さ、音、臭い、蓄尿の改善などさまざまな要件が加わってきました。

冒頭の看護師長さんの言葉にあるように、病院トイレに求められることは、常に変化していきます。

「トイレに花が1輪あるだけでもいい。それが時々変わると嬉しい」「トイレは、唯一ひとりになれる場所」これは、長期入院した白血病患者さんの言葉です。トイレが、ひとりで考えたり、泣いたりする場所でありながら、誰かが自分のことを気に掛けてくれていると感じられる空間であって欲しいということではないでしょうか。

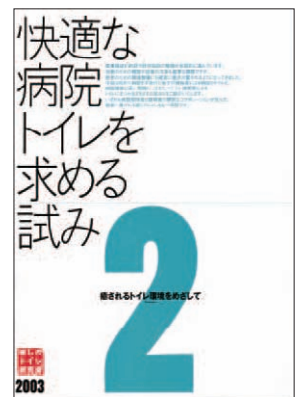
時代に合わせて要求や機能を変化させながらも、患者さんがトイレに求めているのは「癒し」という普遍性です。

今回のVol.8では、患者さんの癒しを実現するために、さまざまな制約条件をクリアして「癒しのトイレ」を実現した事例を紹介いたします。今後の病院トイレのあり方を考えていく一助になれば幸いです。

癒しのトイレ研究会 事務局



Vol.1



Vol.2



Vol.3



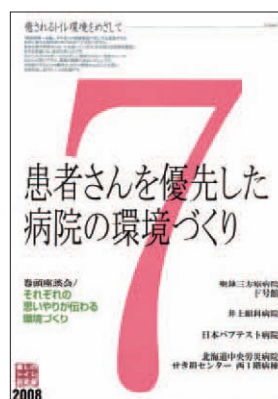
Vol.4



Vol.5



Vol.6



Vol.8

